

第6章 そんなに素晴らしくもない

—なあホレイショー、天と地の間には、
人間の哲学などでは思いも寄らぬことがある。—

どの映画も、最大の失敗作でさえ、製作を始めるときは期待に満ちた雰囲気
に包まれている。製作責任者、主役のスターから電気技師まで、撮影の初日
には、誰もがこの映画こそ、映画の中の映画になり、オスカー賞を総なめし、
映画館に長蛇の列をつくり、キャストや制作陣をプロとしてさらなる高みに
導いてくれること、を夢みている。で、あれば：何故、経験豊富なハリウッ
ドの人々は、どれが上手くいってどれがだめなのかを前もって判断できない
のであろうか？ 顧みてみればその差は歴然としているのに、である。

ただひとつの正直な答えは、全く見当もつかない、ということでしょう。
私に分かることは、映画に関わる人誰もが、整合性をもって、勝者と敗者
を選び出すことなど不可能である、ということです。 私がチャールトン・ヘ
ストンの、あの不運な「ジュリアス・シーザー」でキャスカを演じたとき、そ
れが失敗に終わるとは、思ってもいませんでした。キャストからは考えられ
ないからです。 ヘストンがマーク・アントニー、ジェイソン・ロバーズが
ブルータス、ギールグッド卿がシーザー、リチャード・チェンバレンがオク
タビアス、ダイアナ・リッグがポーシャ、すべてイギリスの素晴らしい舞台
俳優たちに支えられていたのです。ただ一人、ロバーズだけは災難を感じ取
っていました。そして、彼が恐れていたとおり、「ジュリアス・シーザー」
は、映画史上に不名誉な汚点を残すこととなりました。（詳しくは後で述べま
す）

一方、私は「荒野の7人」は失敗するであろうと確信してたと、言わざるを
えません。それが、失敗どころか、大ヒットし、スティーブ・マックイー
ン、ジェームズ・コバーン、チャールズ・ブロンソンらをスターに押し上げ、
西部劇のクラシックとして、制作から半世紀たった今でも楽しまれているの

です。アメリカでは、「カサブランカ」についてもっとも良くテレビで放映される映画となっています。

というわけで、私にはさっぱりわかりません。

映画へのキャスティングの仕方は、確かに成功の兆しとはなっていません。1960年の春、映画俳優組合がストライキをすることとなり、ハリウッドの全ての映画プロジェクトの上に斧が振り下ろされようとしていました。ある特定の金曜日の正午までにすべての配役が終わらない限り、制作にかかることは出来なかったのです。これにより、ユナイテッドアーティストとジョン・スタージス監督がかなり縛られることとなったのです。彼らは黒沢明監督の「七人の侍」を元にした西部劇の構想を練っており、すでにメキシコのクルナバカにセットを建てていたのです。しかし、まだ2人の俳優—ユル・ブリナー、「王様と私」でオスカーを受賞、スティーブ・マックィーン、スターへの階段を登り始めようとしていた若き俳優—しか決まっていなかったのです。残りのキャストと早々に契約するか、さもなくば、映画は終わりでした。

スタージスは、急いで動き出しました。彼は、私のはじめてのA級映画、「都会のジャングル」でのアル中の資産家の息子の演技、その後すぐにオスカー賞候補になるのですが、それを見ていました。彼は、私が、自分の反射神経と技術が腐ってきているという考えに怯えるプロのガンマン、リーの役にぴったりであろうと決めました。私の代理人を通して電話をしてきて、「台本がまだないんだ」と警告しました、「黒沢の映画がベースだ。信用してもらえない。でもクルナバカで撮影する予定だよ。行ったことがない？きつと気に入るよ—メキシコのパームスプリングスだよ」

もし、その時クルナバカで、3ヶ月間を水あたりの下痢で胃が痛くなるような状況下で過ごすことになるのを知っていたら、躊躇していたかもしれません。しかし私はスタージスの申し出を前向きに受けるつもりでした。彼は2つ偉大な映画を制作していました、「日本人の勲章」と「傷だらけの栄光」です、それだけで私には十分でした。「やります。」と彼に告げました。

「良い決断だよ、君」とスタージスは言いました。「それで、君、他に良い若手の役者を知らないかね、あと4人必要なんだ」

「どんなタイプを考えていますか？」

「ゲーリー・クーバータイプ—背が高く、強くて、静かな感じだ」

「大学時代の友人にジェームズ・コバーンという奴がいます。背が高く、痩せていて、すごく良い声の持ち主です。」

「良さそうだね。どこにいる？」

「彼とはもう5年も話をしていません。最後に聞いたときにはグリーンニッチビレッジで同棲してマリファナを吸っているってことでした。」(“Smoking dope”歴史的な正確さで言うと、私は当時使われていた専門用語を再生しています。)

スタージスは相当切羽詰まっていた「君、彼を探し出すことができる？」

「やってみます。」

6件ぐらい電話をした後に、ジミーを探し出すことができました。「君、すぐにここに来た方がいいよ、それも急いでね」と彼に言いました。彼はなんとかお金を借りて、スタージスに会うために、ロザンゼルスに飛んできました。そこから彼のキャリアが始まりました。「荒野の7人」のブリットはコバーンの飛躍的な役となったのです。(実のところ私はコバーンがどのようにしてこれに関わったのかを忘れてしまっていました。2002年彼の予期せぬ死の少し前に、サンセット大通のドームで、ある夜食事をしているときに、ジミーが私に思い出させました。ジミーはその夜の夕食の勘定書きを取り、今度彼の制作する映画で、私に良い役を用意するからと言いました。しかし死神が間に入り込み、私は、彼の愛する若き奥さんポウラが、素晴らしいアレンジをしたパラマウントスタジオでの告別式で、彼に別れを告げました。ポウラはその後も亡くなりました。

急いでキャスティングされた他の人たちには、チャールズ・ブロンソン、ドイツ人スターのホースト・バックホルツ、そしてブラッド・デクスターという俳優、「荒野の7人」の中では「控えめな人」—ほとんどの人が名前を思い出せない役者のグループのひとりで7人の小人たちのなかでほとんどの人がその名前をおもいだせない”Bashful”らがありました。

たぐさんの映画ファンがイーライ・ワラックを7人の一人と言う事がありますが、それは間違いです：彼はカルベラ、我々が助けに行ったメキシコの村を脅かす悪党一味のボスとして映画の中で素晴らしかったのです。

私が7人の中での最後の生き残りであることに気付くと、ハッとさせられます。（イーライは、今もとても元気です。）

コバーンは彼の最初の映画の大きな出演料を、スポーツカーの新車を買うのに使いました。そして映画の撮影中に、当時の奥さんのビバリーと彼女の友人を乗せて、ロサンゼルスからクルナバカへと運転してきました。当時の治安、盗み、必要とあれば喉さえも切るような盗賊がいる状態、を考えるとかなり危険なことではありました。ビバリーの無事到着を祝って、私たち4人は近くのラ・マニヤニタスという一町でただひとつのおなかを壊さないで済むであろうレストランへ行きました。（彼らは蓋を開けてない水のボトルを出していました、他のところは節約のために地元の水を入れ、再び蓋をして、全額請求していました。）

レストランのドアで、赤のベストを着たボーイが丁寧にお辞儀をして微笑み、ジムの車を持って行きました。私はこのことを心配しました—ここはロサンゼルスではないのです、ほぼ無法地帯のクルナバカですから。ジミーは心配しすぎだと私を笑い、楽しい夕食が終わり出てきたときには全て大丈夫なようでした。ジミーは500ペソを渡し、ボーイは車を取りに暗闇へ走って行きました。まもなくして、車のヘッドライトが私たちの方へ向かって来ました、「スピードだし過ぎじゃないか？」私が叫びました。私たちが慌てて逃げると、車は唸りを上げて私たちの横をすぎ、20フィートも離れていないレストランの壁に激突しました。女性たちは悲鳴を上げ、車の前方は衝突で、ぐしゃぐしゃに壊れ、金属とガラスの破片だらけとなり、ボーイは運転手席のドアから頭を出して倒れていました。明らかに彼自身がお祭り騒ぎをしたようでした。

ジミーは時計を見やり、私の肩をたたき、こういいました。「あのさ、ロベルト一夜のこんな時間じゃタクシーも捕まえられないね。」と。

ジミーはいつも冷静沈着そのものでした。

私たちがクルナバカで過ごした3ヶ月は、そんなおかしな事だらけでした。台本をまだ作っている最中だったため、なにも仕事をしない期間が随分とありました。私たちはある晩に、「明日、こうこう、こういうシーンを撮影するから」と言われ、その夜に半透明な紙にコピーされた台本が、翌日の撮影のためにドアの下から差し込まれるのです。何も出来ない怠惰な時間には、私たちはお酒を飲み、ポーカーをし、お腹を壊し互いに同情し合い、このひどい映画で仕事することに文句を言い合っていました。

ユル・ブリナーは、キャストの中で、圧倒的な大スターでした、そして彼自身そのように立ち振る舞いました。彼はお高くとまっていたし、私たちと距離を置いていました。しかしスティーブ・マックィーン、ブラッド・デクスター、そして私がいつもやるファイブカードポーカーには参加しました。私にあまり勝ち運はありませんでしたが、そこに居続けました、何故なら近寄りたいたいユル・ブリナーを研究したかったからです。

数週間後のある午後遅く、もう他の人たちが居なくなり、夕食前のマルガリータが振る舞われるところに、ユルと私はロシア演劇、とくにスタニスラフスキのモスクワ芸術劇場についてと、そのアメリカでの支流について話すことになりました。 私たち二人にとって共通の興味だったのです。 メイヤーホルド、ボレスラフスキ、ラポポルト、ダンチェンコ、ヴァクタンゴフ、ブドヴキン、そして特にミハエル・チャーホフの名前が私の口から滑らかに出てきたので、ユルはとても喜び、驚きました。 その演劇メソッドについて話す計画など毛頭なかったのですが、たまたまそういうことになり、そのことはユルと私の結びつきを強くしました。

私は最近、ユルの書いたミハエル・チャーホフの1955年の本、「俳優へ」の前書きを再読しました。それはユルのヒットした舞台、「王様と私」の2年目が始まった1952年7月23日に、ニューヨークのセントジェームズ劇場にて書かれたものでした。前書きはチャーホフへの手紙の形式をとっていて、取り分け、ユルはこのように書いています、「私の中では、あなたの本“俳優へ”はこの種の本では圧倒的に最良の本で、この分野について登場した如何なるものともくらべる事さえできない位です。そして私の意見では、今まで私が出会ったどの良い小説とも同じくらいに多くを学びます。」

それは、チャーホフがアメリカのすべての世代の役者—私を含めて—にもたらした彼の強大な惹きつける力に対する素晴らしい賛辞です。

私とユルとの芸術的な結びつきは、「荒野の7人」の他の役者たちが彼を嘲笑うことに、一緒に参加するのを妨げることにはなりません—私たちは、彼のプロとしての私たちにとる高慢な態度が主に原因で、こんなことを楽しんでいたので。　そうです、エゴはショービジネスにおいては、時々頭をもたげるのです。

ある時、私たちは—無礼でろくでもない若い役者たちでした—ユルが豚みたいに見えるのだと決めました。(実際のところ、私が最初に似ていると指摘したのだと告白します。)とても魅力的な豚、といっても豚は豚です。そしてこれが彼の背後でのみ使われる暗号となりました、「今日は豚は仕事してるかい？　誰か豚を見かけた？」などのように。

ユルは私たちの中傷には気付かないようでした、もっとも彼が何に気付いて、気づいてないのかを判断するのは難しいことでした。　彼には大好きな話があって—実際のところ何度も何度も話したのです—それは1947年「ルートソング」というミュージカルに出ている時のことでした。(このショウでデビューをしたのが後にロナルド・リーガンと結婚し、やがてこの国のファーストレディになったナンシー・デービスです。)　ユルの説明では、「ルートソング」の中の一人の役者が毎晩彼の声ウォームアップするのに、「ワッフル、ベースボール」という言葉を大きな声で言っていたのだそうです。そして、もちろん、ユルはやってみせました、あの有名な非常に大きな声で叫んだのです「ワッフル！ベースボール！」—とてつもなく大声で。

その話のはじめに聞いた時はそこそこ面白かったのです。　しかしそれが4回目にもなる時には、だんだんと私たちの神経に触ってきました。　次に彼がその話をしたとき、私たちは撮影を待って、馬に乗っていました。(私たちは沢山の時間を馬に乗って費やしていました。)　ユルが「ワッフル！ベースボール！」と大きな声で吠えた時、私は耐える事ができませんでした。　小声で殆ど聞こえるか聞こえないくらいに「オィンク (ブーブー)」と3つ目の言葉を加えました。。

他の仲間は笑いすぎてほとんど馬から落ちそうになりました。

多分ユルは、私が思っていたよりもユーモアのセンスがあったのだと思います。数日後、彼はまた同じ話をしました。今度は、彼が「ワッフル！ベースボール！オィンク！」と叫んだのです。

もしユルが「荒野の7人」のナンバー1スターであったなら、ナンバー2は若きスティーブ・マックイーンでした。そしてスティーブは、ユルからシーンをもぎとることを決心していました。そうしなければ、許せなかったのでしょうか。

私が初めてスティーブを見たのは、1955年9月30日のジェームズ・ディーンの死から間もなくの、コロンビアスタジオでした。ナタリー・ウッドと私は「ノータイム・トゥービー・ヤング」という、私を紹介する映画の衣装合わせのためにコロンビアにいました。

50年代半ばのハリウッドの他の25、6才の若い役者たち同様に、私たちは二人ともジミーに代わるスターとして認められようと必死でした。(私はまだ私の良き友人のウィル・セイジが1955年10月の第一週にロサンゼルスで撮ってくれた写真を持っています。それがまさに私がジェームズ・ディーン風にしていた時代の例です—浮かない顔つき、前髪が無造作に額にかかっている、悲しげな若者の典型)

スティーブは事務所の角に座っていて、ディーンのような色の髪の毛を無愛想な顔に綺麗になでつけ、何かを見ることなしに、凝視していました。私はナタリーに、「あそこにマウンドに呼ばれるのをブルペンで待っているジミー・ディーンがもう一人いるよ。」と言いました。そのあと10年のうちに、ナタリーとスティーブは、もちろん「マンハッタン物語」で共演することとなります。

スティーブはいつも極度に競争心の激しく、偏執症とまで言えるくらいでした。彼にとっては成功するだけでは、十分ではなかったのです。—真の満足には、誰でも彼のライバルだと意識した人以上に成功することが必要だったのです。私はスティーブのこの初期のころから、彼はいつの日か映画でポール・ニューマンの序列を上回るであろうと断言していたのを、記憶しています。その通りに、1974年までに「タワリングインフェルノ」で、

ある意味そうになりました。 実のところ、それはこの業界の人が言う「X序列」でマックィーンをポスターとスクリーンクレジットで一番にのせ、左側ギリギリに、そしてニューマンを2番目に—でもちょっと高めにおきました。

「X序列」をすることで、両方の俳優が一番の序列であると、正当に主張できることになります。

(私の場合はこの同じ多くの大スター共演映画で、第2段の俳優群にアルファベット順でロバート・ワグナーの直前そして O.J. シンプソンとかいう人の直後に載せられました。彼はどうしているだろうか?)

ともかく、私たちが「荒野の7人」を撮影しているとき、私たちがモテルの隣合った部屋に滞在している間、ユルは一軒家に滞在していました。 私の両側にはチャーリー・ブロンソンとスティーブ・マックィーンがおり、どちらがいかにか不幸な子供時代を過ごしたかを競い合うのを延々と聞かされていました。(スティーブは孤児院で育ち、チャーリーは露天掘り鉱山で働きました。私の票はチャーリーに行くと思います。)

スティーブが彼の競争心をユルに向けると決めるとすぐに、彼は私の部屋のドアを朝の6時半、セットに呼ばれる1時間も前、にノックし始めました。当然私は彼を招き入れますが、私たちの会話はいつも大方同じでした。

「おい」とあのハスキーボイスで囁きます、「昨日のブリナーの拳銃を見たか？」

「いや、気づいたとは言えないけどね、スティーブ」

「気がつかなかったって？ 嫌らしい真珠のハンドルだぜ。あんな拳銃を持つべきじゃないよ。綺麗すぎる。誰も映画であの拳銃以外を見なくなるぜ。」(もちろんスティーブがここで意味しているのは、誰もスティーブ・マックィーンを見ない、と言う意味です。)

私に何が言えるでしょう。「監督に話してみたらどう？」と提案しました。スティーブはただ頭を振り—私は明らかに神経質すぎて、彼に対する陰謀の深さと非道さを把握できませんでした。—部屋を出て行きました。

2, 3日後、また早朝のノックがありました。「ブリナーの馬の大きさに気づいたか？無茶苦茶大きいぜ！」

今回は、私も、気づいていました。「でも実際のところさ、スティーブ、僕の馬が7人の中では一番大きいよ。」 私はその馬をセニョール・ジャンボと呼んでいました。

マックイーンは頭を振り「お前の馬なんてどうでもいいんだよ。」と答えました。明らかにスティーブは私を真剣な競争相手とはみなしていませんでした。「ブリナーの馬だよ、俺が気になるのは！」

スティーブは不平を言う以上のことをしました。あるシーンでのことです、私たちの何人か、スティーブとユルを含む、が小川の横で馬に跨り、悪党どもから村を奪い返す相談をしているシーンでのことです。シーンの途中でブリナーが突然黒のステットソンを取り、あの有名な坊主頭を午後の太陽にさらしました。

撮影の合間に、マックイーンが私をそばに引き寄せ、「あのブリナーの奴がやったのを見たか？」と囁きました。彼は、このシーン略奪行為に、我慢ができませんでした。2, 3分後、私たちはもう一度撮影をしました。すると繰り返しブリナーは帽子を取りました。今回は、マックイーンも帽子を撮りました、そしてサドルから乗り出し、帽子を小川に入れ、水で満たしたのです。そして、すかさずそのまま頭にもどしました。水が頭から肩へと流れ落ち、体中を水浸しにしました。

彼は馬鹿に見えました—しかし、少なくとも誰一人として、ユル・ブリナーを見てはいませんでした。

その後年においても、スティーブの偏執狂は、世界で一番高額の出演料のスターになっても拡張し続けました。しかし、全ての「荒野の7人」のメンバーが、ハリウッドのスターダムの道を行った訳ではありませんでした。

ホースト・バックホルツはドイツに戻り、アメリカで活躍することはほとんどありませんでした。ブラッド・デクスターは、二度と演技をすることは、まずありませんでした。彼は残りの人生を、フランク・シナトラをマリブの沖の波で溺れるところから救ったことで、彼の友人であることに専念しました。シナトラが亡くなる日まで、ブラッドは常に彼の映画のプロデューサーとして名前がのり、シナトラの給与支払名簿に載ってました。

デクスターの「荒野の7人」撮影における貢献は、クルナバカでの撮影を終えたあとの、内部の撮影をしたメキシコシティについての詳しい知識でした。彼はどのバーもナイトクラブも、そしてレストランも知っていて、さらにペディキュア、蒸し風呂、マッサージなどの施設にも精通していました。彼は、デロア・デル・リオ、1930年代40年代の美人で伝説の映画スター、の家までへも連れて行ってくれました。

1960年のある聖金曜日、メキシコでは仕事が停止となりました—ほとんどのカソリックの国では—映画撮影も含めて。ブラッドは、スティーブと私も、彼と一緒に彼の言う「北アメリカで最高の売春宿の一つ」に行かないかと誘いました。およそ10年近く、ロサンゼルスサンセット通りを彷徨い歩いて過ごしているうちに、私はたくさんのそのような夜の女性たちと、「メロディールーム」(今はヴァイパールームと呼ばれている、リバー・フェニックスが亡くなった場所)や、ボディショップ、レイチェックルームと言った場所で出会っていました。私は彼女たちの多くを友人としてとらえ、彼女たちと仕事の関係を持たない、とルールを決めていました。しかし、ついでに行くことにしました。

ブラッドはタクシー運転手に指示して、町の静観な住宅街にある高い塀に囲まれた大きな豪華な館へ、私たちを連れて行きました。ブロンドの髪の女主人が、すぐにブラッドに気付き、私たちをまるで大使館のカクテルパーティに来た要人のように歓迎しました。(事実、ブラッドによればこの売春宿は、かつて実際に大使館であったとのこと) マルガリータが振る舞われ、美しい女性たち、そのいずれもがミス・ユニバースコンテストの最終審査に残れるであろうくらい美しく、きれいに髪をなでつけ、長いドレスを着た女性たちが、登場しました。ブラッドは、さらにマルガリータが出てくるころ、二人の黒髪の女性といなくなりました。

薄明かりの部屋でぼんやりとした私の頭の中で、マダム「がどの女性にするのか決めるように」と宣言をしました。そこには7人の女性が残っていました。スティーブはおぼつかないスペイン語で、7人全員を残すようにマダムに言いました。「俺達は“素晴らしい(荒野の)7人”だからね」と。私には、ただの酔っ払いのアメリカ人二人にしか見えませんでした(そして私はとても

気分が良い状態とも言えませんでした)。でも、スティーブの貪欲な提案に反対はしませんでした。私は、クルナバカで私の日給を遣うのにうんざりしていたので、ペソとドルを沢山持っていました。そうしてスティーブと私は、たくさんの大きな枕と7人の女性たちと一緒に居間へ移動したのです。

もしあなたが7人の女性とセックスをした経験がないのなら、このみだらな話を興味津々で聴きたいだろうと思います。私が言えることは、テキーラの影響のせいで、私たちはセックスをするというより、ただひたすら笑ってばかりいた、という事です。

真夜中近くなって、私は翌朝に撮影が予定されていることを思い出しました。私はスティーブに、「支払をしてここを出ようよ」と言いました。

私はまだスティーブが現金を持ち歩かないという有名な習慣を、聞いていませんでした。彼は「おい、ディネーロ（スペイン語のお金）を俺に貸してくれないか？」と応えました。

請求書は700ドルくらいでした—1960年当時では相当な大金です。私は約400ドルと数百ペソを持っていたので、全ての札束をマダムに差し出しました。「私は3、5人分のセニョリータの分とチップを払うから」笑ってくれるのを期待して、言いました。

マダムは微笑みさえもしませんでした。その代わりに指をならし、大男が部屋に入ってきました。敵意に満ちたまなざしで、私とスティーブを見て、私のお金に手を伸ばして、掴み取り、そして「残りはどうやって払うつもりだい？」と訊ねました。

私はスティーブに微笑み、スティーブは大男に微笑みました。大男は。。。微笑みを返しませんでした。

突然スティーブのアルコールでかすんだ真っ暗闇の頭に、光がさしました。彼は財布を取り出し、レストランで使えるクーポンがついているダイナズクラブの小冊子を取り出しました。「これでどうだろうか？」と哀れみを得られるような雰囲気です。大男は私たちの方へ向かって来て、更に意地悪そうな顔つきのメキシコ人が数人現れました。

合図とともに、スティーブと私は振り向いて、スウィングドアを抜け、走り出しました。スティーブは右ヘダッシュし、私は小さなバルコニーへつながるフランス風のドアがある長い廊下を左に走りました。私の後ろで足音がしました、私はドアの数々を開け、バルコニーへ飛び出しました。選択は明白でした：様子を見るか、それともバルコニーの手すりを飛び越えるか。私は、飛び越えることを選びました。

私は湿った草の上に着地し、そしてその館を囲っている高い壁へ飛ぶように走って行きました。ここに逃げ道がありました—そこには私の足場になるような、壁にそって格子の柵がしてありました。私は柵をよじ登り、壁の縁から体を投げ出しました。4メートル弱下の通りを見ると、警備をしているような強固な体つきのメキシコ人が二人見ええました。飛び降りかけた身体を戻すにはもう弱りすぎていたので、そのまま地面に落ちました、殴り倒されるか、さもなく捕らえられることを予測していました。

私は青ざめて二人に微笑みました。彼らはただ微笑み返し、「ブエノス・ノーチェス」と言いました、そして歩き去りました。

私はタクシーを捕まえ、15分後にはホテルのベッドに安堵して横たわりました、スティーブはどうなっただろうと思いながら。

翌朝、彼は45分遅れて、セットに到着しました、ひどい二日酔いでした。彼はなんとかその売春宿に、残金と寛大なチップを払う約束を受け入れてもらったようでした。スティーブの過去の経験が役立ったようです。しかし、メキシコシティに滞在した残りの期間は、私たちの新しい友情関係は明らかに冷えこみました。

幸いなことに、そのことは数年後、私を「ブリット」で彼と共演するように最終的に同意するまで、しつこく繰り返し私を口説くのを、スティーブに思いとどまらせることにはなりませんでした。しかし、それはまた別の話です。。。

1961年3月 母がすい臓がんであることがわかり、化学治療が始まりました。主治医は母の余命が6ヶ月ないだろうと、私に告げました—しかし、当時の慣習に従い、私は母にすべてを明かしませんでした、少なくとも明確には。母がどのくらい自分で気づいていたのでしょうか。それを語ることは、不可能ですが、私が想像するするには、きっと彼女が振る舞っている以上に知っていたのでしょう。

私が俳優として成功し始めたお陰で、ありがたいことに、私は母の最後の数ヶ月間を、彼女にとって特別なものにしてあげることができました。母を初めて飛行機に乗せてあげることができました。母の人生の大旅行に出かけたのです、ニューヨークのゴールデン劇場に「ビリーバーズレビュー」を観劇に行き、母の友人、マリー・ベストのいるシカゴを訪れ、彼女は私の未来の妻になるリンダの友人でもありました、最後に母が20代後半に女優としてのキャリアを始めたミネアポリスを訪ねました。それからまた化学治療を続ける為に、ロサンゼルスに戻り、7月に少し入院しました。新たな化学治療のため、母は旅行中にたまにつけていたカツラをかぶり始めました。

1958年には私はオーキッドアパートメントから1ブロックはなれたパインハーストロードに引越し、そこで私の人生で初めて、魅力的なスイスシャーレー風のワンベッドルームで、緑とロサンゼルスオブブーゲンビリアの香りに囲まれて、完全なひとり暮らしをしていました。そこには素敵な暖炉があり、使われないことはほとんどありませんでした。しかし、今は母の3階建てのオーキッドアベニューのペントハウス、そこは1956年6月に私がヘクト-ランカスタープロと契約をした後に引っ越したのですが、に常時滞在し始めました。

殆どのがん患者がそうであるように、母も状態の良い日と悪い日がありました。母がある日ハリウッド・ヴァインからオーキッドアベニューの家までの数マイルをずーと歩いて帰ってきたと、私に電話してきたのを覚えています。しかし、それが手術不能な癌の母のピークでした。その時とカリフォルニア病院に入院した最後の1ヶ月間の間には、私は母を2週ごとの化学治療のために数え切れないくらい、母を抱えて階段を上り下りしました。パティ・リーガン、「ビリーバーズレビュー」のとてもユニークでおもしろい赤

毛の、が、母を介護するのに移ってきてくれるとさえも言ってくれましたが、丁重にお断りしました。

およそこのころ、ボブ・リース、ハリウッド大通からちょっと外れたところのラパルマス劇場に関係した舞台演出家、が私にハリウッドで西海岸初演の新しいコメディの主演男優に興味はないかと尋ねてきました。その舞台劇の名は「アンダー・ザ・ヤムヤム・ツリー」でした。それはブロードウェイで、ギグ・ヤングが演じ、ジャック・レモンとディーン・ジョーンズで映画化されました。リチャード・ロング、後にTV「ビックバレーとナニーと教授」で大成功する、その彼が私との共演者でした。

私は劇場で、前にジョイス・ジェイムスンが、「ビリーバーナードレビュー」をラパルマス劇場でやっていたときに使っていた、スターの楽屋を与えられました。ボブ・リースは特に私の家庭の事情に敏感で、私が母の見舞いに毎日行くことを考慮してリハーサルのスケジュールを組む事を許してくれました。母の最後の数ヶ月の間、母は毎日夕方5時に、カクテルパーティを開きました。私の多くの友人が母のところを訪ねました。母は体重も落ち、吐き気も少しあり、痛みも感じていましたが、いつも気丈に振舞い、私の仲間たちと素敵に楽しく過ごしていました。誰も母が余命1ヶ月もないなどは、気づきませんでした。

1961年9月6日、私は病院が母の具合が思わしくないと電話してきたとき、ローカル局のゲームの生番組に出演していました。番組はすぐに私を解放してくれました、が、私が病院に着く頃には、母は行ってしまいました。

私は母の部屋に入り、ベッドの上の遺体袋を見ました。私はサヨナラと別れを告げ、部屋を出ました。母が亡くなる前の晩に私に言った最後の言葉を思い出しました「皆、私に期待しすぎたのよ。」それは悲しい最後の言葉でした、私は思いました—誰も、母が沢山の友人やファンにもたらした喜びを正確に捉えることはできないだろうと。

母の葬儀は、1961年9月8日、サンセット大通にあるブレスト・サンクレメント教会で行われました。母をもう10年以上も知る私の友人たちが

沢山来てくれて、墓地までの道のりはマルセラの可笑しな話と、少しだけ涙の入り交じったものでした。母はホーリークロス墓地、母の良き友人で俳優仲間が無声映画のスター、かつコメディエンヌだったザス・ピットや、多くの役者たちが埋葬されている、グロット地区に埋葬されました。（後でグロットを訪れる時まで気がつかなかったのですが、母の一番近くに埋葬されていたのが、母のお気に入り度の低い映画スター達のうちのひとり、ゲーリー・クーパーでした、彼はその年のはじめに癌でなくなっていました。母はクーパーは一本調子で性的アピールがなく、つまらない、と考えていました—特に扇動的なキャグニーやボガートと比べて。）

葬儀のあとの午後は、マルセラと私たちが沢山の笑いを分かち合った、オーキッドペントハウスでのお喋りで満ちていました。私たちはお酒も沢山飲みました。その夜私は「ヤムヤム」のドレスリハーサルをしましたが、あまりよく覚えていません。

9月10日、日曜の夜、大成功のうちに舞台が始まりました、観客は立ち上がり、拍手喝采をし、最後の幕が降りるまで、歓声を上げ続けました。劇場には私の友人たちと、ビリー・バーンズショーからもたくさん見に来ていました、葬儀にきてくれたジョイス・ジェイムスンもいました—その時は付き合ってはいませんでした。（なぜって？私にもわかりません。私たちはある種のささいな喧嘩をしたのだと思います。喧嘩したり、反目しあったり、仲直りをしたりを繰り返すのが習慣になっていました。私たちの付き合いの自然な一部になってしまったみたいでした。）

「アンダー・ザ・ヤムヤム・トリー」はクリスマスのころにビル・ビクスビーが私の役を引継ぎ約1年続きました。

オープニングの夜の観客の中には、美しい若い女優がいました、60年代半ばまで私の人生の一部になる人、ジョーン・オブライエンです。その夜はちょっと会っただけでしたが、彼女はその舞台の他の二人の女優キャストのうちのひとり、バーバラ・スチュアート（これを書いている今にいたるまで半世紀近くも親愛なる友人である）の友人でした。

ジョアンはニューヨークへ出発し、私たちが再び会うまでは、数週間が過ぎ去りました。彼女はロサンゼルス郊外のオンタリオ高校にいる間に、バン

ドシンガーとしてスタートしました。誰かがテネシーアーニーフォードのマネージャーのクリフィ・ストーンに、オンタリオ高校の15歳の美しい女の子が天使のようなルックスで、ひばりのように歌う子がいると教えたのです。彼は彼女の歌を聞き、契約をしました。それから彼女はボブ・クロズビーのバンドとCBSテレビで4年間歌う契約をしました。さらにたくさんの映画にも出演しています、ケーリー・グラント、トニー・カーチス、ジョン・ウェイン、リチャード・ウィドマーク、ジェリー・ルイスらの相手役、そして「ヤングヤングパレード」でエルビス・プレスリーの相手役もしています。

ジョーンは前の2度の結婚で二人の小さな子どもがいました、ミッシェーとランディです。ジョイスの息子のタイラーは1957年の夏には4歳でした。ですから小さな子の人生において、父親代わりになる経験は、ある程度ありました。ジョイスと私が会って居ないときでさえも、私はしょっちゅうタイラーを太平洋へ釣りに連れて行きました。(私自身は釣りについては全く知識がなかったのですが) タイラーと私はラシエネガ大通の子供の遊園地で過ごしたり、クリフィス公園でハイキングをしたりもしました。

ジョーンはその時の男性に没頭する広大な能力のある女性でした。そして私との一時は役5年ほど続いたのです。彼女は天使の歌声を持ち、アイリッシュのお酒飲みのような笑い方をする人でした—彼女は控えめにしか飲まないにも関わらず、です。彼女は母が亡くなってからの最初の1年は、私にとって理想的な人でした。外国でのロケでないときは、いつも私のそばにいてくれました、そして彼女の優しさ、思いやり、友情は多くの私の辛い夜を助けてくれたのです。

もちろん、彼女の性格にも否定的な側面はありました。そしてそれは、いつも私に、彼女のために側に居てほしいという期待でした。振り返ってみると、私は殆どそうしていたとは思いますが、しかし、彼女がこの上なく幸せを感じるほど十分ではなかったのです。

そして1965年1月31日、彼女はマルホランド・ドライブの私の家で死にかけました。私はその日、クリスマスと新年をお祝いするパーティに何人かの友人を招待していました。(後で説明しますが、この休暇の間に私はロシアに行っていました。)サリー・ケラーマン、わたしのウッドロー・ウィル

ソンドライブの隣人も、ゲストの一人でした、それにビル・ティナン、1年後私が反戦運動に関わるようになるのに重要な役割を果たす人物もです。ゲストの中にはジョーン・オブライエンもいました。彼女には1964年7月、「0011ナポレオン・ソロ」の「グリーンオパールアフエアー」でキャロル・オコーナーと一緒にゲスト出演した時を最後に会っていませんでした。

休暇の間に、ハリウッドトレード新聞には、私が1965年のアングルの春の撮影の休みの時に有名なパサデナ劇場で「ハムレット」を公演する計画であると、広告を出していました。ジョーンはこれを読み、彼女がオフエリアを演じることが可能かどうか私に打診してきました。私は「今までその役に挑戦したなかでは一番の歌手になるだろうね。」というような印象を与えることを、言ったと思います。（少なくともその時はです。4年後、私はマリアンヌ・フェイスフルがロンドンのラウンドアバウト劇場でニコル・ウィリアムソンとの共演でオフエリアを演じるのを見ました。）

ジョーンは、私の間接的な答えを理解しました。彼女は私が彼女のシェークスピア役者としてのデビューを、私とオフエリアを演じることで用意しているように感じ取りました。彼女は詩をいくつか録音したので、それを私に聞いてもらいたいので家に来て良いかどうかを尋ねました。私は同意しました。私は彼女をとっても気に入っていましたし、おそらく、ただおそらくですが、うまくやれるだろうと思っていました。

彼女は家にやって来て、私は彼女のその詩の朗読を聞き、とても感動し、そのように伝えました。

ほぼ真夜中近くになり、私はもう休もうとしていました。私の習慣として、私のゲストには好きなだけ滞在してもらっていいけれど、帰るときにはクリスマスツリーの灯りを消して、玄関のドアをしめていくように頼みました。

明け方4時ごろに、私は目がさめてバスルームへ行きました。この前のイギリスへの旅でロンドンから帰る前に、私はロサンゼルスまでの長旅に備えて睡眠薬を購入していました。その睡眠薬を13時間の飛行で侵害された睡眠を安定させるのに、私は2、3錠しか使用していなかったと記憶していま

した。しかし、今、目の前の大理石の洗面台にはすっかり空になった薬箱と一空のコップがあるのを見つけました。

私は暗い家の中を走りまわり、私の書斎、居間、台所には何もないことを確認しました。玄関から入ると見えるホールも見下ろしました、そして隣接するゲストルームも。中には、四柱式ベッドにぐったりと横たわっているジョーンを見つけました。私は彼女の名前を呼び、何度も何度も揺すりました、脈や呼吸をしているかどうかを、彼女のぐったりした体を探しましたがダメでした。

彼女から目を離すことなく、私はビル・ティナンに電話しました、彼はサンセット大通のすぐ南に住んでいて、私の家までその時間であれば15分の距離に住んでいました。彼はすぐに来てくれると言い、そうしてくれました。どういう理由かわかりませんが、私の大きなリンカンコンティネンタルで彼女を運ぶ代わりに、ビルのフォルクスワーゲンの後部座席になんとかのせて、ハリウッド救急病院に運びました。

どのくらいかかったかは覚えていませんが、ともかく私たちが着くや否や若いインターンが救急の入口に来ました。彼らがジョーンの生気のないからだをストレッチャーに載せている間に、私は出来るだけ手短かに説明をしました。若い医者は聴診器で彼女の背中、肺を診察し始め、ずっと顔をしかめて首をふっていました。

そして遂に、彼にはどうしようもないと言ったのです。私は「救急車に乗せて今すぐ中心部に連れて行って！」と言いました。今に至るまで何故かわかりませんが、彼はその通りにしたのです。

私が保安官代理と少々話していると、突然救急車が現れました。私はビルに家に帰るように言い、救急車の後ろに、ストレッチャーにまだ生気もなく横たわっているジョーンと乗り込みました。EMTが生命の兆候を確認していましたがまだ何も現れていませんでした。

私たちが繁華街のロサンゼルス病院に着くと、経験豊かな緊急チームが対応し、すぐに彼女を担架にのせて連れて行きました。病院の中に入っていくと、怖い顔の中年のドクターが待っていました。彼はとても大きな注射器をもってそれを彼女の胸のあたりに突き刺しました。すぐに彼女の身体が

浮いてまた担架にもどったように見えました。そして彼女は私の知らないところへ運ばれて行きました。

もうすでにハリウッド病院で保安官に状況を説明していたので、皆、私にはこれ以上関心を持っていないようでした。私は担当医師の名前と電話番号を訊いてそこを去りました。

その時にはもう朝の7時になっていました。私がジョーンにできることはすべてやったと思い、これ以上のことが起きないことを願っていました。しかし、この状況の別の側面が私に見え出しました— 事実、公の人物としての、この起きてしまった事が新たな話となってしまうであろうということです。そして「0011ナポレオン・ソロ」のもっとも絶頂期のこの番組に、私はこれに関わる他の人々に対して、ちゃんと対応しなければいけない責任がありました。

私はシャワーを浴び、マホランドから30分のMGMへ行きました。着くとすぐにチャック・ペインター、MGMのアンクルとドクターキルディアの広報係、に連絡をとりました。何が起きたかを素早く説明し、出来るだけ早く彼の事務所にくるように頼みました。彼が着くとすぐに「ジョーンの出来事」による悪影響の可能性全てについて話し合いました。

ハリウッドの新聞は話をいろんな風に取り上げるかもしれませんが。悪徳編集者がセンセーショナルに書き立てるかもしれないことは、容易に想像がつかしました。幸いなことに、新聞が出たとき、記事の要旨は「TVスター死にかけた女優を救う」でした。そしてそれが、私とアンクルのために必死に働いている人たちにとっての大惨事になったかもしれないことの終わりでした。

2、3日後にジョーンは回復しました。その後すぐに彼女が友人たちのためにディナーパーティーを開いたと聞きました。

全ての私の友人達、プロのそして個人的な友人達、のアドバイスに反して、私はジョーンをオフエリアに配役しました。さらに「ハムレット」の元々のキャストには、クラウディアス王に私の友人キャロル・オコナーを、そしてポロニアスには、あの名優、オーソンウェルズマーキュリー劇場、そして「市民ケーン」のエヴェレット・スローンがいました。

その当時の私の代理人であるマックス・アーナウの勧めで、私はレオン・アスキンを舞台監督に雇いました。彼は当時、TVの「ホーガンズヒーロー」にコミカルなドイツ将校役で出演していました。最初の読み合わせの後、キャロルとエヴェレットは身を引きました(後で知ったのですが、彼らはアトキンの指示が気に入らなかったのです)。私は王とポロニアスの役をステージソサエティからの友人、ウィル・セイジとピーター・ブロッコに頼みました。彼ら二人とも、とても優れていました。

遂に開演の夜となりました。パサデナ劇場は数年間閉鎖されていて、私の「ハムレット」が劇場にとっての大きな再開のイベントとなるはずでした。私は5年の間、この「自分の意思を決めることのできない男の話」のこの役を、私がやるときにはどのように向上させるか構想を練っていました。

私は、ありとあらゆる様々な人たちに、個人的な招待状を送りました、東海岸のジョンソン大統領のお嬢さんたち(断られました)から西海岸の私の友人たちにまでです。私は彼らを叩きのめす準備を整えていました。

開幕の夜、私は午後1時ころに劇場からほんの少し離れたところで、マッサージをしてもらう予定をしていました。午後1時半ごろ、雨が降り始めました、そして降って、降って、午後ずっと、そして夕方まで止むことなく降り続けました。交通はロサンゼルス中で渋滞し、パサディナ劇場へのすべての道も渋滞しました。

幕の開く時間になったときには、観客席の半分が埋まっていたにすぎませんでした。そして劇場の管理者は中が寒すぎると判断し、古くて、長い間使われていなかった暖房システムをつけました。あの古いパイプがバン、ピンとひどく大きな耳障りな音を出し始めました。

観客のためのドレスリハーサルはやっていませんでした。ここ数年で劇場の全ての席が使われるのは初めてのことでした。その席はガタガタ、キーキーとすでに醜い音を立てている中にさらなる騒音を加え出しました。私たちは1時間遅れで、夜9時に遂に幕を開けました。人々はまだ次々と到着していて、雨には今や、雷鳴と稲妻が加わっていました。(実際のところ、これは夜のエルシノア城の城壁のセットでハムレットの父の亡霊が最初に現れるオープニングシーンには、とても効果的ではありません)

いずれにしても、舞台は続けなくてはなりません。第2場のデンマークの王家の宮廷で、ハムレット、クラウディアス王、ガートルード王妃、レアテスとオフェリア、彼らの父であるポロニアスが会います。長い独白のあとクラウディアスがついに継息子のハムレットに向き、言います、「しかし今私の甥のハムレット、そして私の息子」。その夜に展開されたこの恐ろしくひどい状況のもとで、私は大きな声で「私はここを出て行きたい！」と叫びたかったのですが、その代わりに、シェークスピアの言葉で「家族以上で家族以下でもない」と答えました。

私たちの出来る範囲で、私が削除して、1回の休憩を行い、2時間半のハムレットにして、真夜中に幕がおりました。観客は無事に終わって安心しました、しかしとても楽しんだわけでも、啓発されたわけでも、気分が高揚したわけでもなく、急いで帰りました。

批評はいつになく私にも公演にも一般的に優しいものでした。しかし、私にはそれが大失敗であったことが分かっていたので、それが返って私をひどく傷付けました。私の友人たちも同様に皆優しく、残りの公演は上手く行くであろうことを示していました。そしてたぶんそうであったのです：とても信頼できる有名な週間ヘブライ紙の批評家が2週目の公演を見て、気に入ってくれました。

しかし私にとっては、すべての公演での一番良かったのは、南カルフォルニア中の学生たち—多分そのほとんどは前にシェークスピア劇を見た経験のない—のために行った昼の公演でした。私はそれぞれの昼の公演の後、質疑応答の時間を持ちました、そして彼らがとてもよく話を理解したことに驚きました、彼らの殆どにとっては、筋書きについてくるのでさえも難しかったに違いないのです。

そして遂に、ジョーン・オブライエンはオフェリアとして大成功しました、彼女の演技は「心に触れる」「か弱い」「うっとりさせる」「記憶にのこる」「光り輝く」といった形容詞を集めて絶賛されました。そして彼女は、最後のシーンを素晴らしい悲しみと狂気をもって、美しく歌い上げました。

20 歳代後半のある時、初めてハムレットを演じる前、そして「橋からのながめ」の監督をする前のころですが、私はメロディールームで、LACC の頃からの友人のジョン・ハケットとお酒を飲んでいました。その頃ジョンは、私のパインハーストロードのシャレットの一階に住んでいました。その夜、ジョンは考えこんだ雰囲気で、私に言いました、「君とはもう 10 年近い付き合いだけど、未だに君の怒ったり、沈んだりしたところをみた事がないね。」と。

私はその観察を面白く思いました。彼が述べた事は、表面的には良いことのように聞こえたのですが、ジョンは明らかにそうとは思っていなかったのです。私は「それについて私がどうすべきだと思うんだい？」と言いました。

「君は聖者か鈍感かどっちかだね。君はクリシュナムルティについて何か知っているかい？」と言いました。

「それは何だい？」私と言いました。

ジョンは、「明日何かをあげるよ。それを読んでどう思うか考えをきかせてよ。」と言いました。そしてまたお酒を飲んで、私はそんなことを話したのを忘れました。

翌朝、私はドアのところに、J・クリシュナムルティによる「自我の終焉」というタイトルの本が置かれていました。私は最初のページを眺めました。そして、2 ページ目。さらに 3 ページ目。すっかり夢中になり、昼前に読み終わってしまいました、そしてインド神秘主義に、とても感動したのです。しかし同時に、彼が述べている真理を理解できる状況に、かくももろい人間という創造物が、どのように達成できるのかとても混乱しました。

ともかくも、クリシュナムルティの哲学は、私が 50 年代始めに読んだエリック・フロム博士の「自由からの脱出」という本を思い出させました。その本は第二次世界大戦前に発行され、ハリウッドのブラックリスト時代について私が書いた「Only Victims」にも参照しました、何故ならフロムの驚くべき学説は、数千年もの間人間が到達しようと努力してきた事—自由—であり、実際のところゾッとさせられるものであったからです。これが何故、全体

主義者が強力な衝動に成りうるかという理由なのです。例えば、1945年の後に、多くのナチス主義の人たちが、安堵や安心を共産主義に見出したようにです。

人間は孤独であることに恐怖を抱いている。それゆえに、神が一番初めの男か女によって創り出されたのではなかったのか？

他者と一緒にいる個である必要性は、神秘的な質ではない。どのいかなる考えうる文化において、生きようとするならば他者と協力することが必要である。そして早期の段階においてさえ、人間の子供は彼を育ててくれる者と協同する必要がある。赤ん坊は他者が慰めれば泣くのをやめ、寂しいとは感じなくなる。そして子供は育ち、自然界からだけでなく、他者からもはっきり異なる自分自身を自覚し始める。次第に彼は病気、死にかけること、そして死について学び、宇宙そして自分を取り巻く他の人々と比較し、自身の小ささにおいて如何に自分が重要でないかに気づき始める。

クリシュナムルティに関しては、「真理」(what is)を理解することは卓越した知性と知覚を必要とする。(私はビル・クリントンも同様の論述を—それは“is”が何を意味しているかによる—クリシュナムルティの早期の本を読んで集めて使用したのではないかと疑っている)

それは単にその思想を受け入れるとか与えるということではない。真理を理解することは、努力を必要とする：努力は気持ちをそらすことの一つの形である：そして真理を本当に把握するためには気をそらされてはならない。

私にとってこの誰かが何であるか、あるいは何を言おうとしているのかを理解しようとする概念は、注意散漫な瞬間—騒音、音楽、人々の声—から気をそらそうとしているだけでなく、人生における偏見からも気をそらそうとすることで、誰もが保有していない神々しさのような物を必要とします。

この心の状態を確保しようと試みましたが、多くの努力にも拘わらず、実質的な結果は得られませんでした。

クリシュナムルティによると、真理を理解することは、真理が何であるか気づくことである、現実に横たわる途方もない深さ、幸福、そして喜びを啓示するという。

言い換えれば、それは心理と受け入れるという問題ではなく、心理を受け入れない、貴方が白なのか黒であるのかを受け入れないことである、なぜならそれが事実であるからである。貴方が、ほかのなにかになりたいときだけ心理を受け入れなければならない。事実を認識した時にいかなる意義を持つことが終わる。私は、彼が意味することは過去や未来を思考するために訓練された心、多種多様な方向へ逃れようとする心—そのような心は心理を理解することは出来ない、と言うことを意味しているのだと信じている。

クリシュナムルティにとって、真理を理解することなくして、何が真実かを見つけることは出来ない、そして、それなくして、人生を理解することは何の意義も持たない。（その観察については私は確信を持ってません）人生は常に痛みとの闘いであり、苦しみは続く（私はそれは確かだと思います。）

クリシュナムルティが説明しようとしていたことと正反対のこと—異常な個人主義の状態—を、エリック・ホッファーが1951年に出版した”The True Believer”「大衆運動」という後代に影響を与える作品で述べています。

第二次世界大戦の数年後に書かれたこの本は、ナチズム、ファシズム、そして共産主義という全体主義の目覚めに書かれ、ホッファーは社会革命、民族主義運動あるいは宗教運動といった大衆運動における奇妙な共通点に、焦点をあてています。全てが、ある本質的な特質を共有していて、それが、見せかけの家族のようにみせている、と。

今日、もちろん、私たちはホッファーの言う大衆運動の新たな示威運動に直面しています：自分の目的を進めるために死ぬこともできるという、自爆に見られる過激なジハード（聖戦）。

True believer(信じてしまう人)はクリシュナムルティの悟りを探し求める人とは正反対です。全てを包括的に理解して平和を見出すよりも、彼は狂信的な集団において個人を消し去ることにより孤独という寂しさから逃れるのです。

クリスナムルティとホッファー、それぞれの異なった方法で、数十年に亘り、私の思考において極めて重要な役割を果たして来ています。俳優であるということは、人生の哲学を本当に必要とはしません、しかし、一人の完

結した人間としては本当に必要とします。そしてそれが私があるべき姿として目指した何かであり、同時に照明やカメラの前で楽しんでいたのです。

クリシュナムルティが記したように、自己認識は英知の始まりである、それ故に変化の始まりである。

思考は行動であり、アイディアは真実ではない。真実とはその瞬間から瞬間に直接経験されるべき何かである。それはあなたが望む、たんなる感動する経験ではない。

人は知識の束を超えたとき、思考が完全なる静寂な時のみ、体験する状態になるのである。そして真実とは何かを知るのである。

信仰あるいは知識とはなんであろう。「信じる人」(ホフヴァーの言う)は恐怖から信仰を受け入れる。もし私たちが信仰を持っていなかったら、何が起きていたであろう。我々はとても怯えていたであろう。もし、私たちが神あるいは共産主義あるいは社会主義、はたまた帝国主義、あるいはなにか宗教的なもののいずれかの信念に基づいた行動パターン—我々が条件付けられた何らかの教義のようなもの—をもっていなければ、喪失感を感じる。そのような喪失感から逃れるために、信仰をかように熱心に受け入れるのもその理由のひとつである。しかし信仰は孤立化への過程へ導くのである。

ある信仰、たとえばキリスト教の教義は兄弟愛、互いへの愛、へのゴールデンルールへと形を変える。他者はイスラムのジハードの現在の教義を作り、西洋の自由な民主主義に対する殺人と破壊行為へと形を変える。よって否定的に孤立化した信仰は考える自由も純粋で汚染されていない心あるいは信仰の組織へと導く知識を受け入れ、信じることは許されないのである。我々の敵対者のゴールは9/11に続く、オサマ・ビン・ラディンを信じないイスラムの人々さえも含む全ての異教徒の大量殺人/絶滅である。

40年代後半と50年代のスターリンの場合のように、オサマ・ビン・ラディンの西洋民主主義に対する彼の戦いの「秘密の武器」は、アメリカに彼の異教徒の敵の悪魔的リーダーの役割をさせることにより、あらゆる人々の熱意と自己犠牲作り出す彼の能力にある。そしてビン・ラディンの宣伝活動

努力の主なターゲットは、フランスの哲学者ブレイズ・パスカルが「パンセ」で述べたような、不満をもつ、困惑した人々である：

彼は偉大であろうとするが、自分が小さいのを見る。幸福であろうとするが、自分が惨めなのを見る。完全であろうとして、自分が不完全で満ちているのを見る。人々の愛と尊敬の対象でありたいが、自分の欠陥は人々の嫌悪と侮蔑にしか値しないのを見る。

彼が直面するこの困惑は、想像するかぎり最も不正で最も罪深い情念を彼のうちに生じさせる。何故なら、彼は自分を責め、自分の欠陥を確認させるこの真理なるものに対して、極度の憎しみを抱くからである。

(＊この訳文は中公クラシックス パンセ I 前田洋一訳 から引用しました)

真理への疑問は置いておくとして、キリスト教の教義をかくも魅力的にしているのと同様の質のものが、共産主義、ナチズム、国家主義、ファシズム、そして国際的なイスラム教のジハードを魅力的にしている質なのです。大衆運動の独学の哲学者エリック・ホッファーの言葉によると：

人々が死ぬ聖なる理由が如何に異なっていようと、彼らはおそらく基本的に同じことのために死ぬ・・・何千にも膨らんだ「信じてしまう人」は彼のイメージへの世界を形作る人なのである。宗教から政治にいたるまでのあらゆる理由において罪の意識にかられたヒッチハイカーなのである。彼の熱狂的に死ぬために熱狂的な必要性を保有している。。。彼はは物事の不倶戴天の敵おり、果たせることのない夢のために自分自身を犠牲にすると主張するのだ。

1951年に出版したこの本で、ホッファーは2001年9月11日に導き、そして、7世紀の戦闘的、過激派自殺行為的なイスラム教に対し、世界を、決して弱まることのない、永遠に終わらない民主主義の防衛へと投げ込むであろう、と、イスラムのテロリストの暴行を正確に述べているのです。

エリック・ホフナーは、活動的な大衆運動の主たる関心事は、その支持者たちに統一行動と自己犠牲のための腕を植えつけることにある、そしてそれは、「それぞれの人間の明確性と自主性を剥ぎ取り、意思もなく自己判断もできない無名の塵に転換してしまうことで」達成されるのである、と指摘している。

私の見解では、転換の前提条件は常に自身から遠ざかることであり、そしてほとんどいつも激しい情熱的な雰囲気の中に於いて融合されるのです。1972年、私の著書「オンリーヴィクティムズ」の中で、「内面の均衡に到達した人は、狂信的な活動の候補者にはなり得ない。ゆえに支持者を求める狂信者は、まず、支持者になる可能性のあるものの心の均衡を、奪い取ることから始めなければならない。そのような狂信的な先導者たちはその情熱を燃え上がらせるような、実に正確な手段を通して行っているのである。」と書きました。そして考察をこのようにまとめました、「そして狂信的な情熱が支配するところでは、理知はよそ者である。」

この地球最後の日/アルマゲドンのシナリオは、世界の舞台上で演じられてしまいましたが、これは他の哲学者たち、ハンナ・アーレント、ダニエル・ベルからデヴィッド・レイズマンそして（前にも述べたように）エーリヒ・フロムに至るまで、によっても広く分析されてきています。

人がもし自由であることに耐えられなくなったとき、おそらく政治的な（専制的、独裁的形態）、軍事的あるいは宗教的な様々な形の全体主義の指導者の単純さを求めるでしょう。

フロムは精神分析学者ではないが、独裁主義における絶望的な服従と表現される我々の文明における病に、精神分析の手法を適用しています。

私は、民主主義の台頭は人々を（ほとんどの）自由にし、古臭い教会の権力や中世然とした国家に終焉をもたらしたのは事実であると思っています。そしてかように、人が仲間からの孤立を感じる社会を、関係が非個人的な社会を、そして不安定感が一体感に取って代わる社会を作り出しました。

疎外感や人を様々な逃避の形へ駆り立てます。それは人を、先導者（ヒトラー、スターリン、毛沢東）への盲目的な服従に逃げ道を探し出すことへ追い立てるかもしれません：少数民族あるいは近隣国家に対しての（20世紀のヨー

ロッパがアフリカを植民地化した後自由にした時のように) 武力侵略の残忍で加虐的な計画における盲目的な服従

そのような世界において、芸術家の立場は非常に脆弱です。一般的に、芸術家は自発的に自分自身を表現する個に分類されます。しかし、本当に成功した芸術家のみがその個性や自発性を尊敬されます；もし彼が自分の芸術、絵、芝居、舞踏、歌唱、医術、科学あるいは哲学的な進展を、売ることに成功しなければ、非芸術的な同時代の人々には彼は変人あるいはノイローゼとしてみなされるでしょう。アメリカにおけるソビエトの凝縮された精神機構の患者の証人はグリニッチビレッジに住んでいて、仲間の芸術家によって尊敬されているかもしれません。

この件における芸術家は歴史上の革命家と似た立場であると言えます。成功した革命家は指導的な政治家（ジェフューソン）であり；不成功は、凶暴な犯罪者（ポルポト）です。

独裁的な政治からの逃避は、民主的な自由が新たに到着した移民者たちに差し出すように、人が孤独感を処理できる場合のみ効果があります。

我々、狂気の対象物が、實際上我々の宿命をコントロールできないとき、人生の意味とは何であろうか？

時代を通して哲学者たちは—バーテンダーと顧客も同様に—人生の目的と意味に興味を抱いてきました。豊かに、哲学的に、感情的に生きる人は、物事があるがままに見る、そして自身が持っているものに満足し、この疑問に困惑することはない。彼にとって生きるということの事実は始まりであり、終わりである。しかしクリスナムルティが指摘するように、もし人生の目的が神を見つけることであるのなら、神を見つけるという欲望は、人生からの逃避であり、その神はもう知っている物にすぎないのです。人は自分が知っている物に対してのみに向かって行くことができますのです：もし神と呼ぶものに向かって階段を作ったのなら、明らかにそれは神ではないのです。「現実には生きていることにおいてのみ理解が可能であり、逃避することで理解はできない。」

もし私たちが人との、財産との、信念との、そして思考との関係における行動を理解し始めれば、その関係そのものが恩恵をもたらすということがわ

かるでしょう。この人生の目的についての疑念は愛することをしない人だけが抱くのです。愛は人との関わりという行動においてのみ見つけることができるのです。

著名な心理学者のロロ・メイは、クリシュナムルティについてこう述べています、「東洋の思想家のこれらの静かなる思考の探求は、我々西洋の服従と個人の価値の喪失という問題の根源を見抜いている。私は多くの人々がこの本から自己理解に対する深く、新鮮なアプローチ、そして人間の自由と成熟した愛についての意義への深い洞察を得ることが出来るだろうと思っています。」

前にも述べたように、私はクリシュナムルティの著作から多くを掴んだフリはしないのですが、私が自分の人生を生きるべき方法に、若干発展させうるくらいの十分な彼の哲学の洞察は、拾い集めました。私の愛する祖母が、昔私に良く語っていた古いアイルランドのセオリーがあります、基本的に、過去はもう済んでしまったこと、未来のことはまだわからない。だから「今日と明日を昨日であるかのように生きなさい。」

恐らく、クリシュナムルティは彼の哲学の素人版に同調してくれたことでしょう。

ともかく私はそう願います、なぜなら、そのように私が人生で試みてきた方法だからです。

ジェファーソンは書いています。「人間の本質的かつ不可譲の権利は不変である。」と。

そして、それがこの本には十分な哲学なのです。